

「ラザロの復活」

ヨハネによる福音書 11:17-44

今日のヨハネ福音書 11 章は、その全体が、「ラザロの復活」に関する記事です。福音書の記事の中で、一つの出来事について、これほど長く、詳しく記されている記事は他にありません。この「ラザロの復活」の記事は、ヨハネによる福音書の記者が、それだけ力を込めて、後々の時代にまで伝えようとした主イエスの出来事であったということです。この記事はヨハネ福音書全体のハイライトというべき記事であって、特に、この 11 章 25 節-26 節の主のみ言葉が、その中心聖句と思われまます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」。このみ言葉は、主イエスがラザロの姉マルタに語られた言葉ですが、これは、この記事を読むすべての人々に問いかけている問いではないか、と思います。

このヨハネ福音書が書かれた時代は、紀元 90 年-100 年頃とみられています。ローマの皇帝ドミティアヌスが地中海沿岸の諸国を支配し、皇帝礼拝を強要した時代です。皇帝を神として拝むことを拒否した多くのキリスト者が、迫害され殉教した時代です。そういう中でヨハネ福音書の記者は、多くの信仰のゆえに命を落とした人々の死をいたみながら、死に勝利されたイエス・キリストを指し示しながら、「キリストを信じる者にとって、死は決して滅びではない。イエス・キリストの復活の恵みにあずかって、新しい命に甦らされるのだ」と、復活の希望と永遠の命について強調したのです。

ですから、例えば 16 章 33 節には、主イエスの言葉として、「あなたがたには、世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」という励ましの言葉が語られ、5 章 25 節には、「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」というような、苦難と死を越えた「永遠の命」の希望について多く語られているのです。この 11 章のラザロの復活の記事は、そのようなイエス・キリストのみ言葉を具体的に証しする出来事として描かれているのです。

さて、そのラザロの復活の記事の内容に入ってみましょう。

この物語の舞台は、エルサレムから 3 キロほど離れたベタニアという村です。その村には、マルタとマリアという姉妹とラザロという兄弟が住んでいたのです。イエスさまはエルサレムを訪れるたびに、この家に立ち寄り、以前からこれらの兄弟姉妹たちと懇意にしておられたのです。ルカによる福音書の 10 章 38 節以下にも、イエスさまがこの家を訪ねた時のことが記されています。姉のマルタは甲斐甲斐しくイエスさまの接待をし、妹のマリアはイエスさまの足もとに座って、じっとイエスさまの話に耳を傾けていたという対照的な姿がそこには描かれています。姉妹ですから互いに言

い合いをすることもあったでしょうが、弟のラザロを含めて、彼らは仲の良い兄弟として村でも評判だったと思われまゝです。この兄弟姉妹たちは皆、イエスさまを心から慕い、イエスさまもた、この兄弟姉妹たちを愛しておられたのです。

その幸せな家庭に、突然大きな災難が襲ったのです。弟のラザロが突然、重い病に倒れたのです。その頃イエスさまは、遠く離れたヨルダン川の向こう側のペレア地方に出かけておられたのです。困惑した姉妹は、何とかイエスさまに来てほしいと願い、人を遣わして、ラザロが病気になることを伝えたのです。その知らせを聞いたイエスさまは、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである」(4 節)と言われて、なお 2 日間同じ場所に滞在され、それからベタニアに向かったというのです。イエスさまには、イエスさまの都合と深いお考えがあつてのことです。マルタやマリアにとって、瀕死の弟を看取りながら気が気ではなかつたと思います。そしてついに、ラザロは息を引き取って亡くなつてしまつたのです。

イエスさまが、ベタニア村のマルタとマリアのもとに着いた時には、既にラザロは亡くなつて墓に葬られ、4 日も経つていたのです。イエスさまが来たというので、姉のマルタが迎えに出ました。彼女はイエスさまを見るなり、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」(21 節)と言いました。その気持ちは、私たちにもよく分かります。愛する者の病と死は、耐えがたいものです。イエスさまの対応の遅かつたことが、どれほど悔やまれたかわかりません。これは、妹のマリアにしても同じです。この後の 32 節を見ると、マリアも同じように訴えています。

姉妹とも、瀕死の弟の枕元でどれだけ必死に祈つたか分かりません。こんな時にイエスさまがそばにいて、手を置いて祈つてくれたら…と、どれだけ願つたことでしょうか。亡くなつて 4 日も経つてからでは遅すぎます。なぜ、もっと早く来てくれなかつたのか。その気持ちは私たちにもよく分かるのではないのでしょうか。私たちにも、一生懸命に祈つても、なかなか祈りが聴かれないということがあります。こんなに一生懸命祈っているのに、なぜ神さまは聴いて下さらないのか、なぜ神さまは沈黙しておられるのか、とその御心が分からなくなつたり、時には神さまを恨みたい気持ちになることもあるかもしれません。祈りは、すぐに叶えられるとは限りません。

「主よ、もしここに居てくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたことでしょうに」。このマルタの気持ちはよく分かります。しかし、彼女は決して、失望しているわけではありません。マルタは続けてこう言つたのです。「しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」(23 節)。彼女は、自分の祈りが聴かれなかつたことで、あきらめてはいないのです。「自分の願い、自分の祈りは聴かれなかつたけれども、私はあなたを信じています。今からでも遅

くはありません。あなたが神さまに願ってくだされば、必ず叶えられると私は信じています。私の祈りは聴かれなくても、あなたが執り成してくだされば、その祈りは必ず聴かれます」という、主イエスへの徹底した信頼が述べられているのです。私は今回、改めてこの箇所を読み返して、姉マルタの信仰に深く教えられました。イエスさまはこのマルタの信仰に答えて言われたのです。「あなたの兄弟は復活する」(23節)と。

私たちが祈る時大切なことは、まず第一に、あきらめずに祈ることです。第二に信じて祈ることです。そして何よりも大切なことは、主イエス・キリストの執り成しによって祈ることです。私たちの祈りの力が弱くても、主イエス・キリストが執り成して下さるとき、その祈りは聴かれるのです。

「あなたの兄弟は復活する」。このイエスさまの言葉に、マルタは「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と答えました。すると、主イエスは「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」(25節)と言われたのです。イエスさまの言われた意味は、「死人の復活」ということは、終末における最後の審判の時だけのものではなく、十字架と復活の主を心から信じることによって、今、現在与えられる、ということです。つまり、今、あなたがイエス・キリストを信じ、キリストの命にあずかるなら、あなたは生きる。「たとえ死んでも生きる」。また「生きていて主を信じる者、決して死なない」というのです。つまりたとえ私たちの肉体が死んで朽ち果てても、活けるイエス・キリストとの霊のつながりは切れないということです。それが「永遠の命」ということです。イエス・キリストが私たちのために死んで復活されたことによって、死は終わりではなく、新しい命の始まりだ、ということです。

「わたしは復活であり、命である…このことを信じるか」と、主イエスはマルタに問うたのです。マルタは、その問いに対して「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると、わたしは信じております」(27節)と答えたのです。ラザロの復活というこの出来事は、このマルタの信仰によって、主から与えられた恵みの出来事だ、ということが出来るのではないかと思います。

一方、妹のマリアは、どうしたかと言いますと、彼女は家の中において、多くの慰めのために来ていた弔問客に囲まれ、深い悲しみに包まれていました。28節以下を見ると、イエスさまは、姉のマルタにマリアを呼ぶように命じ、家の外でお会いになりました。ここにも私はイエスさまの細かな配慮を見る思いがいたします。悲しい時は、だれでも内にこもり、悲しみだけを見つめて嘆き悲しみの中に浸りきってしまうものです。もしかしたら、マリアは、弟が死んでから4日間、ずっと家に籠っていたのかもしれませんが。こういう時、まず必要なことは、外に出て、自然の風に当たり、大空を仰ぎ、

気持ちの転換をはかることです。

マリアは、イエスのおられる所に来て、イエスさまを見るなり、足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言って激しく泣き出したのです。姉のマルタと同じ言い方をしていますが、マリアの場合、「しかし…」という言葉がなく、ひたすら悲しみに打ちひしがれて、泣き続けたのです。その様子をご覧になったイエスさまは「心に憤りを覚え、興奮して、『どこに葬ったのか』と言われた」(33 節 b)のです。イエスさまは一体何に対して憤りを覚え、興奮されたのでしょうか。いつまでも泣いていることに対する憤りでしょうか？ そうではないと思います。なぜなら、次の 35 節を見ると「イエスは涙を流された」とあります。イエスさまご自身も心を激しく揺さぶられ、涙を流して泣かれたのです。イエスさまが「涙を流された」というような表現は、聖書の中でここだけです。イエスさまは「全き人」となられた神の子として、私たち人間の痛みや悲しみに無関心な方ではありません。私たち人間の苦しみを共に担い、悲しむ者と共に悲しみ、嘆く者と共に涙される方なのです。イエスさまの「憤り」については、38 節にも「イエスは、再び心に激しい憤りを覚えて、墓に来られた」とあります。この激しい怒りは、愛する者を深く悲しませている「死と虚無の力」に対する憤りだと、私は思います。これは、人間の死という悲しい現実、互いに愛し合っている者を無残にも引き裂き、人を悲しみと虚無のどん底に陥れる「死」に対する激しい怒りなのです。イエスさまは、だれの死をも願わないのです。預言者エゼキエルは、イスラエルの破局を前に、主の言葉として、「イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」(18:31)と語っています。神さまのみ心は、愛する者の滅びや死ではなく、立ち帰って生きることなのです。そのために神さまは、その独り子イエス・キリストをこの世にお遣わしになり、その死と復活をとおして、私たちに「死んでも生きる」という「永遠の命」の道を備えてくださったのです。

主イエスは、激しい憤りをもって、ラザロの墓に立ち向かい、「ラザロよ、出て来なさい」と命じられ、ラザロを甦らせたのです。復活の主は、まさに死の力と闘って死に勝利され、死に打ちひしがれ、悲しんでいる人々に命と希望をもたらすためにこの世に来られ、十字架の道を歩まれたのです。

私たちは、病や老いだけではなく、様々な災害や、事件、事故、そして今、新型コロナウイルスの蔓延によって、死と向き合わされています。さらに恐ろしいのは、核兵器を伴う戦争の危機です。そういう中で私たちは、主イエス・キリストが、自らの死によって死に打ち勝ち、まことの命への道を切り開いてくださったことを覚え、希望をもって生き、すべての人の命が大切にされるよう、祈り、努めたいと願います。アーメン